

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日 運輸省特例技術書誌第六二七号
明治三十一年十月十日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成二十一年三月一日 発行(第四百十二卷第三号)

ホトトギス

三月号



俳句随想 〔三百二十一〕

汀子

平成二十一年四月八日の虚子忌を迎えると虚子没後五十年になる。この節目に当って半世紀の来し方を振り返ってみることは、今後の伝統俳句のために大変大切なことではないかと思うのである。

昭和三十四年虚子が亡くなるまでの俳壇はホトトギスが中心であったと思う。虚子は大きな存在であった。虚子没後二年経ったとき現代俳句協会の中で季題論争が起こり俳人協会が誕生した。そんな中でホトトギスはあくまでも有季定型を守り花鳥諷詠、客観写生を死守し、主宰の年尾はホトトギスの牙城を守り続けた。しかし世間は徐々に協会を中心として俳句を評価するようになって行った。

年尾が死守したホトトギスを私、稲畑汀子が継いだ時、世間ではホトトギスを一俳誌としか見ない人が多くなっていたのである。昭和六十二年、私が日本伝統俳句協会を設立し世に打って出て二十年が経った。今や、世間も再び虚子に目を向け始め、虚子ブームが起こりつつある。

虚子没後五十年という節目に我々は大きな金字塔を立てなければならぬと思う。主義主張を同じくする方々はどなたでも歓迎する。

旬日記 汀子

平成二十年三月一日 菅屋ホトギス会

轟きて家路の一打春の雷
お水取近き旬日旅がちに

三月一日 関西野分会
犬だけか通り抜けたる春田かな
春めくや惑星X解明へ

わが旅路黄沙に消えてゆく行方
畦抜けて春田抜ければ大通り

三月二日 下萌旬会
いぬふぐり摘みたる色を失ひし
活けられてまことに桃の節句かな

大会の余韻に桃の節句かな
滞在の荷に加へたる干若布

部屋どこか桃の節句でありしこと
三月三日 ロイヤル俳壇
雛飾り素通り惜しきロビーかな

木戸開けてここが抜け道下萌ゆる
如月の朝の出支度又迷ふ

出席か否か如月なほ不順
二日目の雛仕舞はれしロビーかな

さまざまに語りつぐ能実朝忌
三月十日 「あらうみ」八百号祝賀
雪吊を外すを見つゝ雨の朝

雪国へ着く残雪の峠越え
朝寝尾を曳かざることも旅路なる

三月十一日 大阪倶楽部
暖かき旅のつづきと思ふ日よ
水草生ふる流るる水の音の中

峠路に湧きて霞でありしかな
残雪の帰路には瘦せてぬし峠
暖かき言葉つなぎてゆく旅路
三月十一日 綿業倶楽部

のどかなる旅路となりぬ峠越え
詩ごころいつも抱きて西行忌
三月十三日 清交社

蓬摘み来たる指先染まるほど
鶴引きしあとの田何もなかりけり

鶴の引く大気漲りはじめけり
耕の間に耕すませ出勤す

耕のすみし一村鎮もれる
三月十四日 工業倶楽部
罷りに都会風呂焚きてをりにけり

お水取すめば吉野の旅支度
予定変へ午後は黄沙といふ予報

二日目は黄沙をさめる雨となる
飛火野を闇に沈めてお水取

三月十五日 関東ホトギス俳句大会前日旬会
青空といふ昨日とは違ふ春
この晴を花の旅路につなぎたく

旅増えてゆけることにもあたたか
道迷ふ人と出逢ひて柳の芽

三月十六日 関東ホトギス俳句大会
東の花の人も迷うて柳の芽
まだ花の気配漲るばかりかな

十五代 將軍の墓所花辛夷
三月十八日 有恒倶楽部
御水取済めば忘れてしまふこと

暖かき二三日とはもう馴染み
北窓を開き六甲山と逢ふ

暖かき旅を身軽になりしこと
風通しよき北窓を開けにけり

三月十八日 無名会
切れ長の目におちよば口雛飾る
しづけさの中に雛のささめごと

表情に春めく心生れけり
結局は雛の出会いとなりしこと

春めくや予定変更ありしこと
雛の間となりし二階へ招かるる
三月十九日 夏潮旬会

初花を雨に見つけし人に蹤く
見て欲しき二階に小さき雛在す

漢方一步又一歩行き戻りつつ
み吉野の花に魅けをる家居

み吉野の花の旅路へ向かふ日々
三月二十日 ホトギス社吟行会
みよし野の旅近づけて花のこと

初蝶に逢ひし明るさ抜ける園
昨日逢ひ今日逢ひし初蝶のこと

三月二十六日 悼 近江小枝子様主人
尽くされし日々たふとすと花惜む
三月二十七日 きざらぎ会

春雷の落ちし火花も空の旅
蛇穴を出つこれより外出がち

花を待つ心漲りゆけるかな
沿線の花の遅速を言ひながら

刻々の花にみよし野遠からず
三月二十八日 時雨会
雲に乗る旅路促す涅槃西風

東京の桜に四日滞在す
みよし野へつなぐ桜の絵巻かな

三月二十九日 旬会と講演の会
震災後十年蓬生ふ更地
仕事とて花の滞在とはなりぬ

浮かるるは花の心に添ひしより
屋根替を終へし路傍の一軒家

花冷の中に旅路のあることを
三月三十日 野分会
今花の旅路ならざるなきことを

春田より春田へ誰も抜けぬ畦
花よりも仕事よ仕事よりも花よ

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十年三月五日 一水会

誰も知らぬ虚子の遠山笑ひけり
蟻の道二十世紀を残しゆく

三月六日 蕉心会

ビルの壁塗り替へてゆく黄沙かな
大河てふ冴返る色ありにけり
啓蟄や裏返りたる土の色
橋潜る船音うらら水きらら
紅梅の香に康生氏居るやうな
春の風邪ですと陸奥より電話

三月七日 六甲会

木の芽風富士山頂を明かし行く
恋破れ夢は残りて山笑ふ
大盛を所望の女山笑ふ
笑ひ初む六つの兜蔵す山
木の芽風睫揺らしてゆきにけり
うをんたな長閑に鯉跳ねてをり

三月八日 明石の春を詠む吟行会

三月十日 朝日カルチャー若草句会

山頂に靈気集めて木の芽風
句碑除幕するより木の芽風立ちぬ

三月十三日 土筆会

鉛筆の音に始まる大試験
烏貝地球の太古秘めし黒
大試験済めば恋せよ男どち
ヴィオロンの課題曲てふ大試験
大試験一足す一を忘れけり
薔薇の芽の色を育ててゐる日差

三月十五、十六日 関東ホトトギス大会

首都といふ下町風情池うらら
恋猫と恋人達の為の池
鷗外の遺徳に触れもして遅日
我が家より三十分の旅うらら

三月十八日 草木瓜会

耕して地球の裏の声を聞く
耕を見下してゐるエンデバー
うつすらと髭生えし吾子卒業す
耕せる裏六甲の奥の奥
遺伝子は母に受け継ぎ落第す

三月十九日 登高会

揚雲雀スペースシャトル近づけて
野に遊ぶ心の濡れてゆきにけり
剪定に空も切られてゆきにけり
線となり面となり、となる雲雀

イカロスの翼を持てるかに雲雀
剪定や稲城野に空降りてくる

三月二十日 虚子記念文学館投句

暖かく聖木曜日迎ふ館
三月二十日 ホトトギス社吟行会
下町の騒ぎ復活祭前夜
下町といふ大都市に霾れり
昔こんなビルは無かつた街うらら
これよりは花の大江戸てふ期待

三月二十五日 若水句会

早世の宗匠偲び利休の忌
利休忌や茶の湯の世界裏表
つばくろのあなたカラヤン君大野
街中に袴溢れて燕来る
朝市の海辺春子に会ふも旅
数足らぬ清記用紙の罫うらら

三月二十六日 目黒学園句会

若鮎を育て母なる琵琶湖かな
椿落つ利休果てたるその日はも
陽炎に高層ビルの踊り出す
陽炎に丸ビルいふよ丸くなり
若鮎の底に消えゆく迅さかな
若鮎の跳ねて湖北の動き初む

三月二十九日 ホトトギス社句会

花の往路花の復路でありにけり

雑詠

廣太郎 選

こほろぎの夜を読み耽る机あり 泉大津 三輪満子
 空の碧より青梨を撈ぎにけり 同
 過ぎし日を探しゐるらし秋の蝶 同
 紅葉は今年遅おすやると京 八尾 岩垣子鹿
 一枚の流れ紅葉を追ふ紅葉 同
 鯉五匹五匹が読めて水の秋 同
 アグネスもペトロも露の殉教碑 熊本 岩岡中正
 秋風といふ道連れのあるばかり 同
 のこす句も捨つる句も秋風の中 同
 空の琴線にふれたる鴟猛る 八代 山下しげ人
 星のしづくになり花火消えにけり 同
 空もまた偲ぶものなり初時雨 同
 峰寺へ近づくとほかにそぞろ寒 長岡 安原 葉
 雨つのもり来れば峰寺冬近し 同
 雨に濡れすすむ紅葉や峰の寺 同
 外出許可出での日和や鴨の陣 熱海 嶋田一歩
 鴨の陣なかなかとばぬものと見る 同
 鴨の陣静かやあひる二羽さわぐ 同

咲きし萩直ぐ散り入院騒ぎの家 同 嶋田摩耶子
 虫すだき一病棟を持ちあぐる 同
 病む夫の電話の指図冬支度 同
 やや寒や今がはるかとなる老に 福山 竹下陶子
 邯鄲の闇に前方後円墳 同
 一水に鴛鴦の詩を散らしたる 同
 人偲ぶ深秋の歩となりゆきぬ 龍ヶ崎 今橋眞理子
 目礼ですれちがふ人初時雨 同
 語らるる縁の不思議年尾の忌 同
 冬構とは覚悟するだけのこと 榎原 稲岡 長
 遠山は時雨れてゐるか模糊として 同
 時雨れゐる端は日当り雑木山 同
 出来秋を四方に青邨旧居かな 神戸 山田弘子
 破芭蕉月光砕き止まざりし 同
 霧しづく軒の光となる目覚め 同
 朝寒や白髪増え来し髭を剃る 福岡 松尾緑富
 いつとなく着ぶくれしまま家居がち 同
 隧道を出でて冬田の広がり 同
 禅林に板木の音や秋深し 東京 橋本くに彦
 掃き寄せし物の色にも冬近し 同
 老松の影置く園や冬支度 同
 寡黙愛されたる虚子の露けさを 神戸 千原叡子
 穂芒の光と翳のささめごと 同
 反論をする気の失せて冬めきぬ 同

雑詠句評（二月号より）

初めての町見慣れたる 鯛雲 龍ヶ崎 今橋真理子

なつて残る。しみじみと情が見て取れる。（廣太郎）

比奈夫・くに彦・一步
昭代・弘子・しげ人
暮潮・仁義・雅
純也・廣太郎

流灯の消え胸中に靈残る 福山 竹下陶子

流していた灯籠の灯がふと消えてしまった。が、胸中であつた流燈の主の靈が一段とはつきり残っているのに気付いたのである。本当は胸中の靈も同時に流れ同時に消える方が好ましいようにも思えるが、魂だけは消えないというのにも至極自然のようない気もする。（比奈夫）

お盆の間、帰つて来ていた先祖の靈をお盆が終ると又あの世に見送る、という意味の込められた「流灯」である。生前家族として親しく過ごした思い出も、お盆の間はより強く甦ってくるだろう。そして別れの日、この流灯の灯が消えた後も、その思い出が靈と

夏のうち雲の峰ばかり気にしていた目には白片が集まって、まさに鯛が群れているような雲を見ると、鯛雲と言う季題にしみじみと秋の到来を感じる。掲句は大気が澄んだある日の旅先での吟行句であろう。城下町かも知れない。名所旧跡を訪ねての楽しい散策の空の景である。見慣れたると詠んだことで、その空は作者の住む町にまで広がって雄大な鯛雲の大きさが伝わつて来ると共に、初めての町でありながらどこか親しみのある町であつたように想像される。（くに彦）

旅行か何かで初めて訪れた町である。何もかもが見知らぬものばかりで、少し不安をも覚えたのではないだろうか。そんな時空を見上げると「鯛雲」が拡がっている。暮らしている町にも同じ鯛雲は見える。その共通点に安堵した作者である。季題を愛する俳人の心持ちである。（廣太郎）
(以下略)

天地有情

花子選

美しき星の下なる端居かな 旭川 大塚千々二
 補聴器を外してよりの夜長かな 同
 葛ひそと咲いて己が葉に隠れ 東村山 村松紅花
 世に出づることなく葛に隠れ棲み 同
 秋出水住宅街といふ油断 東京 稲畑廣太郎
 竹伐りてより百幹の鎮もれり 同
 ふと思ひ出したるやうに秋の蟬 長岡 安原 葉
 新涼の風水音をはなれても 同
 老衰や気炎を上ぐる炉辺の無く 豊中 瀧 青佳
 毎朝を感謝三拜日向ぼこ 同
 山頂の星に包まれ冬立つ夜 東京 今井千鶴子
 初冬の星のホテルに眠りけり 同
 秋の蚊の先師の御軸忌を修す たつの 浅井青陽子
 水亭の深める秋と思ひつゝ 同
 日本語 よし藤袴 吾亦紅 徳島 上崎暮潮
 工科出て文科好みや藤袴 同
 蘇我の血の記憶を秘めて紅葉濃し 榎原 稲岡 長
 夢とうつつ通ふ刹那や霧の中 同

花芒いつしか咲いてをりしこと 熱海 嶋田一步
 今日からの目立ちはじめた花芒 同
 束の濃くなるまで摘みぬ赤まんま 同 嶋田摩耶子
 紫蘇の花散るよ羽撃く蝶の来て 同
 行秋の京の二日は夢なりしか 神戸 長山あや
 そこはかとなく日の香立つ初時雨 同
 長老といはるゝ席に悴める 福山 竹下陶子
 持ちよりしホ句好もしや年忘 同
 夢殿を出て一塔へ秋の風 八尾 岩垣子鹿
 畦みちを太鼓が帰る里祭 同
 草の絮風になじんで飛び行くを 福岡 松尾緑富
 散策の草の実つけて戻りたる 同
 湯の街の更けゆくほどに露けき灯 神戸 三村純也
 源氏千年紀の須磨の月を待つ 同
 年尾忌や一期一会となるまじく 姫路 桑田永子
 炉開を済ませしばかり看とらるる 同
 穂芒のはらりと抱く宇宙かな 神戸 山田弘子
 林檎パイ焼いて小さな客を待つ 同

天地有情句評

汀子

ふと思ひ出したるやうに秋の蟬 長岡 安原 葉

秋の蟬らしい雰囲気を捉えて妙。

老衰や気炎を上ぐる炉辺の無く 豊中 瀧 青佳

気炎を上げる炉辺を恋うのも老いたのかと存問する。

美しき星の下なる端居かな 旭川 大塚千々二

初冬の星のホテルに眠りけり 東京 今井千鶴子

天寿を全うされた作者の生き方の一齣。

初冬の満天の星空の下のホテル泊まりという至福。

葛ひそと咲いて己が葉に隠れ 東村山 村松紅花

水亭の深める秋と思ひつゝ たつの 浅井青陽子

控え目に生きて来た葛の花に学ぶ姿勢。

龍野聚遠亭の秋の進む情景を愛でて。

竹伐りてより百幹の鎮もれり 東京 稲畑廣太郎

工科出て文科好みや藤袴 徳島 上崎 暮潮

竹伐ること整った竹藪の姿。

俳人として振り返る歲月。